

桑野塾

桑野塾

検索

<http://deracine.foo.jp/kuwanojuku/>

大学などの研究者に限らず、興味を持って研究していることを自由に発表しあう「広場」です。どなたでもご参加いただけます。それぞれの興味が少しずつ重なり合うことで、新たな知見を見いだそうという場です。

第27回

2014年
11月8日(土)
15:00 ~ 18:00

早稲田大学 早稲田キャンパス16号館 820号室

★どなたでもご参加いただけます。会場に直接お越しください。参加無料

☆終了後、近くの居酒屋で懇親会を開催します。(飲食費は別途)

※予約の都合上、懇親会参加をご希望の方はなるべく事前にご連絡いただくと助かります。

※報告者・タイトルは変更の可能性もあります。ご了承ください。



シリーズ バレエ・リュスと日本人 最終回

大田黒元雄と『露西亞舞踊』——1914年のバレエ・リュス体験

報告者: 沼辺 信一



大田黒 元雄(1917年)

1914年ロンドン、21歳の大田黒青年は舞台に魂を奪われた

一昨年・昨年に続き、百年前の日本人のバレエ・リュス体験をたどるシリーズの最終回。

1913年秋、ニジンスキー退団という危機を招いたディアギレフは、必死の努力で劣勢を挽回し、翌14年のバレエ・リュス公演を成功に導きます。ロンドン留学中だった21歳の大田黒元雄(1893~1979)はこの連続興行に通いつめ、『金鶏』(R=コルサコフ曲)でゴンチャロフの華麗な舞台装置に目をみはり、『ペトルーシュカ』でストラヴィンスキーの先鋭的な音楽に打ちのめされました。帰国後の大田黒はそのときの体験を糧に、音楽評論の道を歩み始め、1917年には『露西亞舞踊』を刊行、自らの見聞をつぶさに書き留めています。

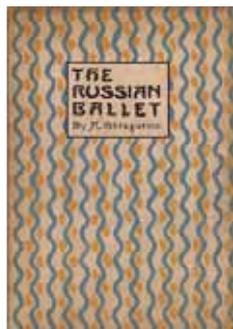
日本におけるバレエ受容史上、画期的な出来事となった「1914年のバレエ・リュス体験」の一部始終を紹介します。



ゴンチャロフによる『金鶏』舞台デザイン(1914年初演)

●沼辺信一(ぬまべしんいち)

編集者・研究家。ロシア絵本の伝播、日本人とバレエ・リュス、プロコフィエフの日本滞在など、越境する20世紀芸術史を探索。
ブログ <http://numabe.exblog.jp/>



大田黒の著作『露西亞舞踊』
(音楽と文学社、1917年刊)